

それが主の名によってもたらされたのです。

主の名は主の名を受け入れ、呼ぶものの名に寄り添うものです。名前はお互いが呼び合うことよって確かめられます。主の名を呼ぶものを主は呼んでくださるのです。それを「知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のよくな者に」示されたといわれます。それが父なる神の御心に適ったことだと明言されます。主イエスは「御自分は父である神を知り、父は自分を知っている、すべてのことは、父から主イエスに任せられている」と言われています。

これは、父なる神と一人子である主イエスと本当に思いが通じている、一つ思いだと言われています。幼子のようなものこそこの名前の秘密が分かるようにされたのです。

幼子のようなものとは、大人の利害や分別大人の知恵、社会の知恵とは異なっています。幼子の知恵は純粹です。親を知っていること、親は自分を知り、必ず探し出してくれること、親に頼ることがなければ生きることができないことを知っています。大事な時には、自分の名が呼ばれることを知っているのです。人の死は人の名を消し去るものです。人の名が失われようとするときにこそ主が主の名によって、その人の名が天に記されていることが意味を持つのです。そこにわたしたちの慰めと喜びがあります。

主イエスの名は、教会の信仰告白の核になっています。イエス・キリストという呼び方自体、イエスはキリスト・救い主であるという告白です。主イエスの名を呼ぶこと自体が信

仰を告白することです。

教会はこのことに委ねてきました。その人が主の名を呼ぶようになった。子どものように親を呼ぶように主イエスを呼ぶものになった。そこに信仰を認め、受け入れてきたのが教会です。そして、教会はその人の名を主に委ねてきました。

主イエスが父なる神から全てのことを任ざれており、その方が天にわれらの名が記されていることを宣言し、それを御自分で大いに喜ばれ、わたしたちにも喜べと言われる。主イエスは「ほらあなたの名が記されている。嬉しいではないか」合格発表の掲示板で名前を見つけて喜んでくれる親のようです。そのお方は、死に勝利し復活の主となられました。名が天に記されている確かさは死を越えるものです。

教会は記念すべき人々を確信をもって、このお方に委ねています。教会という言葉はエクレシアという言葉です。「そこから、呼ぶ」という言葉から成り立っています。「招集」という意味になって行きました。教会は呼ばれた者たちの集まりです。呼ばれたものが主の名を呼ぶのが礼拝です。

そして、幼子のように御子主イエスと父に信頼し、礼拝を重ねる。そこには確かにこの名前、この人生で、天につながっていることが明らかにあります。地味な歩みです。しかし、ここには主イエスが喜んでくださる姿があります。

主は、あなたがたは悲しむがその悲しみは喜びに変わると言われました。愛する者を主

の御許に委ねることは悲しみ深いことです。しかし、わたしたちは失われることのないところにお委ねしました。それゆえに悲しみを乗り越えていくことができます。それには主の名に生きることが大きな慰めになります。(九月一七日 召天者記念礼拝)

八月講壇一覽

第一主日(八月六日) 公同礼拝

「時のしるし」

エゼキエル 三六・二五〜三六

マタイ 一六・一〜一二

高橋和人牧師

第二主日(八月一三日) 公同礼拝

「天の鍵」

イザヤ 二二・二〇〜二五

マタイ 一六・一三〜二〇

高橋和人牧師

第三主日(八月二〇日) 公同礼拝

「命を見出すために」

申命記 三〇・一五〜二〇

マタイ 一六・二一〜二八

高橋和人牧師

第四主日(八月二七日) 公同礼拝

「一つになって、ひとつにされる」

姜 偃米牧師

詩 編 九〇・一b〜二

使徒言行録 二・四三〜四七